パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第 16 号）

「２０２６年の幕開け：マルチラテリズムにとって正念場の年」

２０２６年１月３０日

ユネスコ日本大使の加納です。

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

皆様年末年始はいかがお過ごしだったでしょうか。

年明け早々、パリでは雪が降りました。

雪景色のパリ

新年を迎えるにあたっての私のメッセージはユネスコ日本政府代表部ホームページに下記リンクの通り掲載しました。

https://www.unesco.emb-japan.go.jp/files/100958502.pdf

ユネスコを巡る昨年の主な出来事を振り返りつつ、今年の抱負を綴っております。ぜひご覧頂ければ幸いです。

今年も早１ヶ月が経とうとしていますが、今回は今年に入ってからの主な出来事をご紹介します。

（ユネスコ日本人職員、日本メディア関係者との新年賀詞交換会）

１月１４日（水）には、恒例のユネスコ本部事務局に勤務する日本人職員との新年賀詞交換会を開催しました。今回は、ユネスコと関係の深い教育分野の国際協力に携わる多国間ファンド「教育のためのグローバルパートナーシップ」（ＧＰＥ:Global Partnership for Education）で勤務する日本人職員、及びパリで活動する日本メディア関係者にもお声がけしました。

ユネスコ事務局には本年１月現在、５０名の日本人職員が様々なステータスで勤務しています。他の国際機関に比べると、分担金額など様々な指標を勘案した上での日本人職員の比率は高く、また女性職員が多い（３４人）が多いのが特徴です。中堅クラスの職員の層が厚いと言えますが、幹部ポストの数が少なく、意欲と能力のある日本人職員の更なるキャリアアップを応援するのが日本政府代表部の重要な仕事です。

賀詞交換会では、私から新年の挨拶として、ユネスコ及びマルチラテラリズムを巡る国際情勢は厳しいものがあるが、今年加盟７５周年を迎える日本は引き続きユネスコをしっかり支えていく方針であり、日本人職員の方々にもしっかり職務に邁進して欲しい、日本政府としても応援していきたいと激励しました。

新年賀詞交換会

なお、ユネスコ日本人職員の方々には、ご自身の経験を代表部ホームページに随時寄稿してもらっています。以下のリンクでご覧頂けますので、国際機関での勤務に関心のある方はぜひ覗いてみてください。

https://www.unesco.emb-japan.go.jp/itpr_ja/japanese_staff_article_main.html

（大使公邸での「初釜」）

１月１６日（金）には、大使公邸にて「初釜」を開催しました。

日仏茶道交流会会長として日仏文化交流に長年尽力されてきた森宗勇さんが年初にパリを再訪された機会をとらえて、お点前の労をとって頂きました。森さんには、昨年６月、１１月と２度にわたり当代表部主催のレセプションの機会にもお点前を披露して頂きましたが、今回は小人数の招客に日本の茶道をじっくりと堪能してもらう形としました。

大使公邸での初釜

今回の初釜には、ハリード・エル・アナーニー・ユネスコ事務局長夫妻、イリーナ・ボコバ元ユネスコ事務局長、各国ユネスコ大使、そして森さんが親交を結んでこられたフランス旧王族オルレアン家のアングレーム公ご夫妻やアンヴァリッド博物館関係者など、１０数人の方々に参加してもらいました。

冒頭挨拶で私からは、ユネスコ親善大使を務め、昨年８月に逝去された千玄室・裏千家第 15 代宗匠の提唱された「一盌からピースフルネスを」の理念に

触れつつ、エル・アナーニー事務局長や各加盟国と連携しながら、ユネスコとマルチラテラリズムを支えていく決意を述べました。

森さんのお点前によるお茶を堪能した後、エル・アナーニー事務局長やアングレーム公にも茶の湯の体験をして頂きました。その後は、２０１３年に無形文化遺産に登録された「和食：日本人の伝統的食文化」の代表例である正月料理「お節」を中心とした和食に舌鼓を打ちつつ、共に新年を迎えた喜びを分かち合いました。

エル・アナーニー事務局長による茶の湯体験（左）と伝統的正月料理「お節」（右）

（堀井外務副大臣のパリ来訪、ユネスコ事務局長との会談）

１月２３日（金）には、堀井巌外務副大臣がパリを来訪し、エル・アナーニー事務局長との会談を行いました。エル・アナーニー事務局長が就任後、日本の政治家と会談するのは今回が初めてです。

堀井副大臣はこれまで外務大臣政務官や参議院外交防衛委員長などの要職を歴任した、外交分野の経験豊富な政治家です。

今回の会談では堀井副大臣より、就任１年目を迎えたエル・アナーニー事務局長がユネスコが直面する課題に対処し、改革を進めようとする姿勢を評価しつつ、ユネスコのあらゆる分野での活動を引き続き支援していくとの日本の基本的立場が伝えられました。米国の脱退をはじめ様々な難題を抱えるエル・アナーニー事務局長にとって、日本からのエールは心強い支えになったと思います。

堀井外務副大臣とエル・アナーニー事務局長との会談

ユネスコ本部訪問の際には、堀井副大臣はまた、イサム・ノグチ氏設計の「平和の庭」をはじめとするユネスコ本部内の日本ゆかりの施設を視察しました。さらに、ユネスコ事務局で勤務する日本人職員達と懇談を行い、教育、科学、文化、予算など事務局の各担当部局で勤務する日本人職員たちを激励しました。

堀井副大臣の「平和の庭」視察（左）と日本人職員との懇談（右）

（２０２６年：マルチラテラリズムにとっての正念場）

新年早々、世界では様々な出来事が起こっています。ベネズエラでは米国政府によるマドゥーロ大統領の身柄拘束が行われ、イランではデモ活動とイラン当局の衝突により多数の死傷者が発生、またウクライナではロシアによる攻撃が続いています。

１月７日には、米国政府による６６の国際機関・国際条約からの脱退表明がありました。昨年のユネスコなど一部国際機関からの脱退表明に続くもので、

マルチラテラリズムに対する米国の否定的な姿勢がより鮮明となっています。

ダボス会議では、グリーンランドを巡る、米国トランプ大統領と欧州首脳の間の溝が一層顕在化しました。また中東情勢を受けたトランプ大統領主導による「平和評議会」設立の動きについては、国連システムとの関係で懸念が示されています。ダボスではカナダのマーク・カーニー首相の演説が注目を浴びましたが、同首相は、一部の大国があからさまに経済的威圧を行うようになっている現在、世界はこれまでの「ルールに基づく国際秩序」からの断絶(rupture)に直面しているとし、価値を共有するミドルパワーの連携により、現実的な形でマルチラテラリズムを強化する必要性を訴えています。

２０２６年はマルチラテラリズム、そしてユネスコにとって正念場の年と言えます。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大